

「行動する彫像」の言語記号の「生」・「感性的なるもの」・「他者」

——ルソー『エミール』のピュグマリオンニズムの美学的射程(1)——

馬 場 朗

問題の所在

本論は、ジャン・ジャック・ルソーによる教育論『エミール』⁽¹⁾をピュグマリオンニズムの美学史的観点から検討する前半部をなす。この後に予定される後半部とともに本論が特に着目するのは、この著作の教育論それも特に言語記号を巡る議論が「感性的なるもの」を軸に展開されたことの興味深い含意である。

ルソーの名著の一つ『エミール』は一七五〇年代後半に執筆が開始されたとされる。『社会契約論』や『新エロイズ』を次々と生み出し、ルソーが著作家として最も充実した時期に当る。この時期ルソーは、現今の文明と社会への従来からの激しい批判を継続しつつも、むしろ積極的に同時代的な問題圏への提言を行い始める。『社会契約論』は彼の批判する社会体制とは異なる形での近代民主制の礎を提示したし、『新エロイズ』は彼の文芸批判を踏まえた上で十八世紀文学に新たな流れを結実させる。激烈な演劇批判つまりスペクタクル批判でヴォルテールらを震撼させた『ドランベールへの手紙』でさえ、祖国ジュネーヴに新たな「スペクタクル」たる「祝祭」を最後には提示しよう。ルソーが、『エミール』で行った社会状態で生きる自然人エミールの教育という方向(IV, 483-484)もまた正にこの意味で理解すべきである。冒頭で述べた本論文の方向に話を戻すならば、成程、友人コンディ

ヤックの『感覚論』からの影響が夙に指摘されるこの著作の言語論が、「感性的なるもの」という基点を根本に置いたことなど何ら驚くべきことでないように見える。しかし、次の論考が最終的に明かすように、この教育論の言わば主人公「エミール」は、ルソーの音楽劇『ピュグマリオン』の彫像「ガラテ」と連続する可能性を持つ。この主人公がある種の「作品」としての位相を実は担うと同時に、「行動する彫像」たる彼のその発達過程において、ピュグマリオンニズムと不可分な「生」の感性的次元が中心的役割を担うからである。しかしながら、正にそこに本論が強調する次元に関わる問い、つまり広い意味での「言語活動」を巡る問いが実はルソーによって常に意識されている事実を見逃すべきではない。言語を巡る問題圏がこの教育論の「行動する彫像」としての主人公の「感性的なるもの」の中枢にいかにか深く組み込まれているかを『エミール』全五篇の中の特に第一篇から第四篇を中心に明らかにすること、これが全体の探求の前半部をなす本論の最終目標である。

一、「自然の歩み」の基点としての

「感性的なるもの」と「行動する彫像」

それでは、『エミール』の著者が新たに提案する理想教育とは如何なるものか。成程、それが所謂公的な教育とは別の次元で構想される

のはルソー自身が明言することであり、更に重要なこととして社会的人間の教育というよりむしろ普遍的人間の教育が目指される。それはまた、身分や社会制度の違いを超えて人として「生きる」(身分や社会制度が流動的であるが故にそれに左右されずに人として「生きるのびる」ことがまずは強調される。無論、ルソーは特に社会制度それ自体から人が独立して現実的に「生きる」ことの不可能性を同時に指摘している)ということである。ルソーはいう。「生きること(vivre)、それが私の生徒に教えたいと思っている職業だ。私の手を離れるとき、彼は確かに役人でも軍人でも僧侶でもないだろう。彼はまずは人間(homme)だろう」(IV, 252)。「人間」として「生きる」こと、これが『エミール』の主人公「エミール」の導かれる理想の教育である。そもそもルソーは『エミール』で「教育」を「自然」によるもの、「人間」によるもの、そして「事物」によるものの三つに区別する(IV, 247)。彼は、更にこの内の「人による教育」の二つの位相(一般的な公教育」と「個別的な家庭教育」)を区別した上で、現在ではもはや「公教育」は不可能であり、自らの著作で目指されるものではないと明言する。「公教育(institution publique)はもう存在しないし、存在することもできない。祖国のないところには、市民はあり得ないからだ」(IV, 250)。しかし、たとえカッシーラーの言う「来るべき市民」としてのエミールの教育なる解釈が余りに極端であるにせよ、この教育が社会や政体を巡る議論としばしば交錯するのも事実である。この意味で、もはやエミールを「未開人にして森の奥深いところに追いやる」(IV, 551)ことは不可能である。むしろより正確には、彼は「社会状態」に深く関わらざるえない「自然人」とならねばならない。「自然状態のうちに生きる自然人と、社会状態のうちに生きる自然人との間には大きな違いがある。エミールは人の住まないところに追いやられる未開人ではなく、都市に住む様に作られた未開人だ」(IV, 483-484)。ここから『エミール』の教育論に特有な課題が生じる。たとえ「公教育」の位相を最初から排除するにせよ、「自然人」たるエミールを周

囲の「社会人」及びその動的な諸関係と調停させねばならぬということである。それはまた、「自然による教育」からエミールに齎される「自然の歩み」を中心にしつつ、「家庭教育」の「人為」によって更に現今の社会状態と調停させることである。ここで言う「自然の歩み」とは、「私たちの能力と器官の内部的発展」を司る「自然の教育」(IV, 247)により与えられる人間の身体的成長それ自体に基礎を置く不可避的過程のことである。しかし、「自然の歩み」を人間の世界に合う様にそして社会的に完全に矯正することがここで重要なのでは全くない。我々は、時間展開の中でエミール自身の身体とそれと不可分な限りでの精神とに徐々に現れる「自然の教育」つまり「自然な歩み」を確実に突き止め、これをエミールへの教育の道程の基礎とすることが求められる。何故か。何よりもまずは身体性に基礎をおく「感性的なるもの」で発現するこの「自然の歩み」とは、自己展開するエミールの「生」それ自体の決して忘却され得ぬ「原点」であり「贈与」だからである。成程、「自然の歩み」と不可分な「感性的なるもの」とは、『エミール』と深い関係にあるコンディヤック『感覚論』の一元の推進原理「感覚」と大きく重なるであろう。繰り返すならば、何よりも「自然の歩み」もしくは「自然の教育」とは、まずは感官の身体性の次元で展開されるからである。「我々は感官をもつて生まれている。そして生まれたときから、周囲にあるものによって色んな風に刺激される」(IV, 286)。それ故エミールの教育が極めて身体・感覚的段階を重視するのは当然であり、更にコンディヤックの仮説、「彫像」の感覚論的成長の記述と重なるものを見るのは難しくない。実際、『エミール』に先立ちこれと内容的に切り離しがたい『道徳書簡』で、ルソーは自らの友人の「彫像」の感覚論的仮説に触れていた(IV, 1096-1097)。また『エミール』でも、後に本論でも直接に検討することになるが、コンディヤックの名を直接に挙げることは無いものの、その仮説に暗に再び言及している(IV, 280-281)。それだけではない。『感覚論』の「彫像」の場合と同様に、第二篇ではエミールにおける五官それぞれの行使と

それらの相互補完及び触覚の（特に視覚の誤りの補正に関わる）重要性を述べる。「感官の」それぞれをできるだけ良く利用するのだ。それから、一つの感官の印象を他の感官によって調べるがいい」(IV, 380)。「反対に」そもそも触覚は視覚と同時に使われるものだが、瞬時の判断を下しがちな視覚とは反対に「触覚による判断は最も確実である。それは最も限られた判断であるからに他ならない。我々の手が届くところより先には及ばないその判断は、他の感官がうっかりしていたことを訂正する。他の感覚はやつと認められる様な対象の上にまで遠くのびて行くのだが、触覚が認めるものは全て十分に良く認められるからだ」(IV, 389)。

しかしながら、コンディヤックの経験論から多くの重要な示唆を受けつつも、ルソーには独自の視点が存在するのを見逃すべきではない。

そもそも『道徳書簡』及び『エミール』でのコンディヤックの「彫像」の言及には常にこの彼の友人である感覚論者へのある種の距離が示されていた。『道徳書簡』での彫像の仮説の言及は、人間の知識の原点が暗い窓としての五官であるが故の不可避免的な不完全さを強調するものだった。『感覚論』の著者がむしろ感覚の自己展開だけで人間の理想の認識の最低限の出発点が獲得されるのを強調するのは、全く異質な見解が根底にあることになる(IV, 1096-1097)。

本論にとってより興味深いのは、しかし『エミール』でのコンディヤックの彫像への以下の辛辣な言及であろう。「生まれたとき、子供が一人前の人間の身長と体力を持っていたと仮定しよう。丁度パラスがゼウスの頭から生まれた様に、母の胎内からいわばすっかり武装して出てきたものとしよう。この大人とも子供ともつかないものは、完全に無能な人間であるに違いない。自動人形か、身動きもせず殆ど何も感じない彫像のようなものに違いない」(IV, 380)。ルソーによるある種の誇張があるにも関わらず、コンディヤックは確かに「体と器官が完全に備わっているが、自分自身と自分の周りの全ての物に対して全く新たに目覚めていく人間」を提唱したピュフオンを受けて、既に一

人前の肉体と器官を備えたがまだ一度もそれらを使用していない「彫像」の仮説を提示したのである。⁵⁾成る程、『感覚論』の彫像の仮説が原初的な感覚の行使が既に如何にその後の理知的な認識行為の母型を孕むことを示すための極めて理念的な思考実験であるのは、ルソーも十全に意識していたであろう。とは言え、『エミール』の著者はかかる諸感覚の進展の基底にあるべきものが斯様なコンディヤックらの仮説では原理上余りにも無視されている契機に注意を促す。「この人間は欲求を感じて不快になるだろうが、それが何か良く解らず、それを満たす手段を考えつくこともないだろう。胃の筋肉と手足の筋肉との間には直接的な交流はなく、従って、周囲に食物があったとしても、それを掴むためにその方へ近寄ったり、手を伸ばしたりすることもないだろう。そして、その体は既に成長し、手足はすっかり発達し、従って、子供の様に落ち着かないで絶えず体を動かしているということもないから、食物を求めて動き出す前に、飢えて死んでしまうかもしれない」(IV, 380)。つまり、ここでは「生き延びる」という「生」一般の出発点が見失われているのではないか、ということである。

成る程、例えば視覚に関するコンディヤックの立場から言えば、全体瞬時だが混沌とした視覚が、触覚の継起性との協同で、全体瞬時で判明な視覚になることで、彫像は「より良く生きる」ことができるとも言えよう。しかしながら、コンディヤックにとって何よりも認識論的関心が第一であるのを見逃すべきではなからう。故に、全体瞬時で判明な視覚はむしろ人間認識が最終的に向かう理想形態の雛形を提示する点でその決定的意味を与えられる。だが、現実の子供の観察から自らの「彫像」たるエミールへの教育を構築せんとするルソーにとって、「良く生きる」とは何よりも知覚や認識以前に、身体を実際に働かせ運動させることである。その意味で、諸感官の訓練を導入する文面で、「泳ぐこと、走ること、飛び跳ねること、コマを回すこと、石を投げること」といった「機械的な運動」(IV, 380)にとって必要なこととして諸感官の行使が必然化されていたのである(これらの感官は腕

や足を使うときに必要でないものではない」(IV, 380)。そもそも『エミール』が産着について長々と論じたことの意味を改めて考えてみよう。「生まれたばかりの子供は手足をのびしたり、動かしたりする必要がある。長い間、糸玉の様に縮こまっていた麻痺状態から手足を解放する必要がある。成る程、子供は手足をのびさせてもらえらるが、それを動かすことを妨げられる。頭も頭巾で締め付けられる。まるで、子供が生きている様に見えるのを、人は心配しているようだ」(IV, 254)。産着が否定されるのは、まさに幼児が生まれ落ちてから身体を動かすことでこの世界を生き抜くことを学ぶべき存在だからである。「生きる」こと、それは呼吸することではない。活動することだ。私たちの器官、感官、能力を、私達に存在感を与える体のあらゆる部分を用いることだ」(IV, 253)。そしてまた、エミールが自己とは異なる物体があること、自己とこれらの物体が存在する空間としての「延長」を見出すために、エミールの触覚や視覚の単純な行使にルソーは頼ることはしない。最も根本にあるのはそれらの感官を伴う「運動」なのである。「我々が我々とは別のものがあるのを学ぶのは運動によってだけなのであり、延長の観念を得るのも自らの運動によってのみなのである」(IV, 284)。

更にいえば、あくまでも知覚そして認識の発展はかかる身体性の「運動」の獲得から派生するであろう。実際、視覚や触覚による対象認識に即して言えば、ルソーは対象の形状把握として特に空間位置を特に重視する。何故か。自らの脅威となる対象、或は逆に捕捉し獲得すべきもしくは目指すべき対象、これらの位置を確定し即座に必要な「行動」に出ること、ここでもより良く「生き延びる」ことを「エミール」は求められるからである。実際、諸感官の訓練がその重要な部分をなす第二篇を締め括るのは、自らの息子が空中の風の正確な位置をその影から瞬時に測定できたことに満足するハイド卿の語る逸話ではなかったか(IV, 424-425)。それ故にこそ、コンディヤックの場合ではあくまでも手による対象の継起的把握に限定される傾向のある触覚

が(確かに『感覚論』第二部第五節でコンディヤックは「触覚」と「運動」との関連を極めて重視するが、興味深いことにその記述は少なくとも『エミール』以前の初版にはない)、むしろ運動する身体が近接する外部との全身的な感覚として捉えられる。「例えば触覚の様に、目を覚ましている間は決してその働きをやめない感官がある。それは我々の体の表面全体に広がっていて、体を傷つける虞れのあることを我々に警告する普段の見張りの様なものになっている」(IV, 381)。それ故にこの感官が夜に視覚に頼らずに周りの状況を把握するための積極的で確実な手段となりうることにルソーは着目する(本論第四節で触れる「夜の遊び」はだから一つには触覚の訓練を巡る逸話である)。「壁から半歩離れたところでは空気はそれ程濃くなく、抵抗が少ないので、他とは違った感覚を顔に与えることになる。[中略] 船に乗っているときには、風がどんな具合に顔に当たるかによって、どの方向へ進んでいるかということだけではなく、川の流れが遅いか速いかも解る」(IV, 381-382)。ヴァルガスは、ここにある種の「筋肉感覚」を巡る驚嘆すべき哲学的思考を見出すであろう。

かくして、諸感覚をこれから行使せんとするエミールは、単に諸感覚を受動的に享受する「静止した彫像」ではなく全身を諸感官と共に拙いながらも運動させんとものがく言わば「行動する彫像」である。特に、乳幼児期のこの「行動する彫像」は、「生」の「活動的原理」に満ち溢れた存在である。それ故に、哲学者達が人間の生来の善性への反証と考えたがる乳幼児達の好む「破壊」でさえ、実は彼のその力漲る「生」の「行動」の積極的な帰結でしかありえない。「子供の心にはそれ[「活動力」]が溢れ、外へ拡がって行く。子供は言わば回りにある全てのものを動かす位に自分が生に溢れていることを感じる。何かを作ろうと壊そうとそれはどちらでも良い。ただ、事物の状態を変えれば良いので、変えることは全て行動なのだ」(IV, 289)。忘れるべきではないのは、むしろ、『エミール』の教育論にわたる核をなす「自然の歩み」としての「生」こそが、コンディヤックの「静止した彫像」を

退けるということである。とは言え、この「自然の歩み」という「生」はエミールが成長するにつれ、その役目を結局は徐々に失うことにはならないか。この「行動する彫像」の成長過程が、「感性的なるもの」が直接に関わる「身体的次元」から離脱し、「精神的次元」つまり社会の関わり性として抽象的な精神の領域に彼が移行することに他ならないからである。しかしながら、『エミール』の著者は、かかる「精神的次元」においてさえも「生」のこの「感性的なるもの」を決して忘却することは無い。否むしろ、他者関係と不可分な「精神的次元」そのものの本来の姿が「自然の歩み」のこの「生」自体と不可分に結びつけられる。本論は、以下の節で、特に「感性的なるもの」と不可分な「生」の問題圏が、この著作の言語論上の議論で重要な役割を演じることを検証することになろう。

二、『エミール』言語論の概観と

そのルソー言語論研究史の中での位置

まず、『エミール』における言語記号にまつわる記述を概観しておく(プレイアド版による具体的な頁数の参照は、煩瑣になるので省略する¹⁰⁾)。そもそもこの教育論は、エミールの生誕直後からソフィとの結婚に至るまでの五つの時期にそれぞれ対応した五篇から構成される。言語記号及びそれにまつわる書物等についての記述もまた、エミールらのそれぞれの時期に相応した形で展開されることになる。

生誕直後の乳幼児を扱う第一篇では、言葉による通常の言語に至る以前の言語記号の形態に焦点が当てられる。すなわち、当時の言葉では自然記号と呼ばれるものだが、無論この場合は発信者が具体的な乳幼児であるが故に、特に彼らの発する叫びとその抑揚およびその顔に表れる表情(ルソーはそれを「身振り」に含める)が重要となる。また、抑揚を重視する箇所、パリもしくは都会の住民と地方の農民達の言語とその抑揚の対比が語られる。第二篇では、不器用ながら

もある程度大人達の話す言語を使いたず幼児期のエミールが前提とされる。とは言え、ここでは具体的に感性的なものに未だ限定されている幼児の発達を視野に入れる立場から、抽象的で理性的な言葉による教育の危険が指摘される。そこから、更にこの段階での複数の外国語や古代語の修得やフォンテーヌの寓話の子供に理解できない修辭表現や含蓄の害悪も指摘される。尚、第二篇の後半には五官とそれらの行使にまつわる記述があるが、特に聴覚に対応する能動的器官とされる声の三つの抑揚の指摘があり、ルソーの音楽的言語論との関係で注目される。明瞭にはっきりした音節を話すがまず目指されるに依じて、音楽に付いても模倣的で演劇的な音楽は避けられ単純な歌が推奨された音符という「書記(écriture)」を巡る批判的な記述がなされるのである。第三篇は、思春期に入る直前の時期のエミールを対象とする。やはり第二篇と同じく、言葉だけの空疎な教育の危険が語られ、言葉や書物よりも実践そして具体的な「もの」による教育が推奨される。そこから、エミールが読むべき例外的な書物として孤島でたぐ一人暮らす『ロビンソン・クルーソー』が挙げられることになる。第四篇は、身体的に大きな変化を蒙った思春期のエミールが対象とされる。異性を中心とする他者関係や社交そして道徳性と宗教といった「精神的なるもの」の問題圏が前面化する時期である。直接的な言語記号論的記述としては、「語り」よりも視覚的な「しるし(signe)」を称揚する重要な部分(後述する様に『言語起源論』第一章と重なる)が着目されてきた。第五篇は、エミールが未来の伴侶たるソフィに出会い最後には結婚して子供を授かるまでに当てられる。音楽やダンスを巡る記述には彼の『言語起源論』や音楽論的言語論との関連が伺えるが、直接の言語記号論的記述は極めて少ない。

全五篇を通じて、乳幼児の言語形態、文字としての言葉(書物)、事物と言葉の関係、視覚記号と言葉の関係など様々な話題が語られるが、重要な記述は第一篇から第四篇に集中している。本論では本第二節から第四節にかけて主に以上で挙げた話題を我々の立場から纏め直し検

証して行きたい。但し、上記で述べた以外にも、第四篇の憐れみや自己愛・利己愛を介する他者関係や更には趣味を巡る記述、第五篇の女性に固有の仕草そして言葉遣いを巡る記述も、実は言語記号論的に見逃せないところがある。これらの記述での言語記号論的な無視できない重要性については、第四篇と第五篇に分析を集中する今回の論考で、改めて触れたい。

上記の概観からまず了解できるのは、言語と精神の間の相互補完的關係であり、その関係の最初の基点としての「感性的なるもの」の重要性である。実際、「人間不平等起源論」(以下『不平等論』)が既に示した様に、言語記号と知性との相互補完的發展(これはまたコンディヤックの「人間認識論起源」の基本的な立場でもあり、『不平等論』のルソーもまたこの立場を出発点として取ってコンディヤックへの反論を試みたのであった¹⁾という位相もまた『エミール』の著者にとつては無視できぬものであったろう。『エミール』が、子供の段階での段階的な言語修得が精神的成長過程と不可分であるのにたびたび言及するのはそのためである。この意味で、『エミール』における言語記号論の一つの中心となるのは、感性的な言語記号であるのは当然でもある。抽象的な概念や思维の段階には未だ到達せぬ幼児や子供と不可分な「感性的なるもの」に深くねざす言語記号に大きな脚光が浴びるのである。

ある意味で、斯様な言語記号が、「自然人」達の感性的な言語として、『不平等論』が提示したものと類似するのは言う迄もない。『不平等論』における多数の他者を前提とした抽象的思维と不可分な「比較」を十分に行使し得ぬ「自然人」達の言語記号である。彼らもまた、言語記号上の恣意性もしくは約定性の未だ強くない感性的な生の直接性に根ざした自然記号を使用していた、とルソーは述べる。「人間の最初の言語、最も普遍的で最も活力に溢れ、集まった人々を説得せねばならなくなる前に唯一必要とされた言語は、自然の叫びである」(III, 148)。この「叫び」の言語記号の段階の次に、多様な声の抑揚(inflexions de

la voix) や模倣音(des sons imitatifs)そして更には視覚的な身振り(gestes)などが加わって行く(III, 148)。同様に、『エミール』では、ほぼ同じ様な自然記号への大きな関心を示す記述が散見される。例えば、現在の(それも大人の)人の使う言語のすべてが「自然」ではなく「人為」としての「技」によるものであるのに対して、正に「自然」が普遍的に彼らに生じさせる言語として乳幼児の「叫び」があげられる。「我々の全ての言語は技術の産物である。長い間、自然で全ての人に共通な言語があるかどうかは人々の探求の対象であった。疑いなくそれはあるのであって、それは子供達が言葉で話すことができる前に話す言語である」(IV, 285)。その「叫び」は、『不平等論』とまるで相応するかの様に、「身振り」(但しこの場合は身体能力が未だ未発達な乳幼児の手ではなく、その顔の表情に表れるとする)が加わる(「声の言語に身振りの、同じくらい活力に溢れる言語が付け加えられる」(IV, 286)。そして、これらの感性的な自然記号それも特に最後の視覚的身振りへの着目は、同著書第四篇での「身振り」を含めた古代の感性的な特殊な言語記号(上記の概略で述べた様にルソーはそれを「しるし(signes)」と呼ぶ)の記述に繋がることにもなる。「彼らが「古代の弁論家や古代人」最も生き生きと語ったものは、言葉ではなくしるしによって表現されたのである。「中略」トラシユプロスとタルクイニウスは芥子の頭を切り、アレクサンドロスはお気に入りの者に印をおし、ディオゲネスはゼノンの前を歩くことで、長々とした語りよりも一層良く語ったではないか」(IV, 64)。それは人の手足の身振り或は身体そのものの、そして視覚的事象を言語記号と化するものである。同時代の言語記号論的芸術論に大きな影響を与えたデュボスの著作(「詩と絵画についての批判的考察」)においても、「(詩文が言葉という「制度的な記号」を主に用いざる得ぬのに対して、詩と異なり絵画が用いる)視覚記号は「自然記号」として、伝達すべき対象や意味を瞬時に相手に理解させるのが強調されていた²⁾。斯様な自然記号へのルソーの関心の背後に、所謂スタロパンスキの言う様な「透明」つまり、指示すべ

き対象に対して言語記号が限りなく自らの存在を消すべきという志向が働いていると言う解釈もできよう。事実、『エミール』は、言語記号が表すべきものの「再提示 (representation)」のためにデリダの言う意味での「代補・代理 (supplément)」ではない「言語記号」(そして話者の存在を欠いた言葉だけから成る「書物」もそこに加えられる)への不信を繰り返し主張する。例えば、言葉による教育への不信をルソーは以下の様に言う。「私は言葉でする説明 (le discours) は好まない。年少の者はそれに余り注意を払わないし、殆ど記憶に留めない。実物 (les choses) / 実物 / 我々は言葉 (les mots) に力を与えすぎているということを私はいくら繰り返しても決して十分ではないほどだ」(IV, 447)。「言葉」だけではない。「書物」そして何かの代わりをする記号一般でさえ以下の様に言われるのである。「私は書物が大嫌いだ。書物は知りもしないことについて語ることを教えるだけだ」(IV, 448)。「一般に、事物を示すのが不可能な場合以外は、その代わりに記号を代用するようなことはしてはならない。その記号が子供の注意力を吸収して、それが表している事物を忘れさせるからだ」(IV, 454)。恰も言語記号そしてこれと不可分な他者とのコミュニケーションを可能な限り排除し、「自然人」の孤独な自己の円環への回帰のみが目指されるかの様でもある。実際、『エミール』の著者は、エミールに読ませるべきものとして、漂着した島で孤独に自律して生きるロビンソンを巡るあのデフォーの小説を推奨したではないか。「一体その『エミール』が読むべき初めての」素晴らしい本とは何か。アリストテレス、プリニウス、ピュフォンか。いや、『ロビンソンクルーソー』だ。ロビンソンクルーソーは、彼の島で、孤独に、仲間の助けも、どんな技術の道具も無いのに、しかし生きながらえ、自分の身を守っていくことができ、更には快適な生活のようなものさえ手に入れたのだから、これこそあらゆる年代の人を引きつけ、様々な形で子供達に楽しい者とする様なお話だ」(IV, 456)。

とは言え、『エミール』における言語記号論は、単なる『不平等論』

の「自然状態」を巡る孤独な自然人の言語記号の記述の反復では決していない。むしろ、今迄『エミール』の言語論が『不平等論』のそれと共に注目されたのは、彼の言語論上の名著『言語起源論』が、その起草時期の確定も含めて、研究者の間でかなり関心の対象となったことと関連している。実際、『言語起源論』は、憐れみの社会性や模倣概念の「精神的次元」との繋がりを巡って、『不平等論』よりもむしろ『エミール』とかなり共通する部分をもつ。それだけではない。言語記号に関する部分でも、視覚記号の記述などは文面それ自体が重なるものがある。また、音楽的抑揚を未だ「身体的次元」にある幼児が他の二つの抑揚と混合させることができない等の記述も、音楽的言語を「精神的次元」と不可分だとする『言語起源論』の音楽的言語論と繋がる。

しかしながら、『エミール』には『言語起源論』の枠組みでは原理的に語り得ぬ様な言語論が示されることに着目したい。成る程、『エミール』における言語記号にまつわる論述は、『不平等論』以上に、必ずしも明確な形で纏まてはいない。逆にだからこそ、これまでの研究者達は、『言語起源論』研究が一段落すると、たちまち『不平等論』だけでなく『エミール』の言語記号論を殆ど顧みなくなつたとも言える。これ迄の研究では、ルソー言語論の明示的な名著『言語起源論』の議論のあくまで補足として専ら、この著書の言語記号論が扱われていたからである。しかし、『エミール』は、音楽そしてこれと不可分な言語の起源を自然状態から社会状態の移行期という純粹に仮構された時代を中心に据える『言語起源論』とは異なる設定をもつ。

我々は、『エミール』が言語記号を巡るルソーの思索に独自の貢献をしたことを強調したい。本論が執拗に繰り返す「生」そのものの暗黙の叫びとの関連がそれである。この関連こそが、この教育論に言語記号と直結すべき観点を内在的に潜在させる根源でもある。無論、それはルソー自らの体験に根ざした「子供」という眼前の現実もしくは「生」のことでもある。これによってこそ、彼の言語論上の記述は極めて変

化に富む柔軟なものになると同時に一つの基本軸がそこに与えられるのである。

三、「生」と不可分な感性的な言語における他者

むしろ、「エミール」が「生き延びる」ことは、『エミール』の読者が安易に同一化しかねぬ様な、『不平等論』の言う「自然状態」の「自然人」の孤立した自律的「生」と厳密に同じではない。むしろこの後者の「生」こそは、他者の介入を徹頭徹尾排除する点で、コンディヤックの『感覚論』のあの孤独な「彫像」に近いとさえ言える。

これに対して、『エミール』の「行動する彫像」にとって「生」とは、「他者」の介入を不可欠の前提にした上でこれとの調停の中でのみその自律性を修得されるべきものである。そもそもその生誕と同時に「エミール」そして乳幼児は、「他者」の「助け」を前提とする他ない。既に見た様に、「運動」を欠いたまま既に出来上がった自らの身体を一度も行使せぬあのコンディヤック的な「彫像」が餓死すべきであるのに似て、「大きく力強く生まれた」人間もまた「他者の助け」の必要が感じられぬために餓死すると言われるのはその意味においてである。「かりに人間が大きく強く生まれたとしても、その体と力を用いることを学ぶまでは、それは人間にとって何の役にもたつまい。かえってそれは有害なものとなる。他の人が彼を助けようとは思わなくなるからだ。そして、放り出されたままのその人間は、自分に何が必要かを知る前に、必要なものが欠乏して死んでしまうだろう」(IV, 246)。むしろ「我々は弱者として生まれる (nous naissons faibles)」(IV, 247) 或いは「人間の最初の状態が惨めさと弱さの状態である (le premier état de l'homme est la misère et la faiblesse)」(IV, 286) とこうのと、或いはかかる「弱者」たることを重要な契機として自らの「生」の手段とすることが、「エミール」あるいは人間一般の最初の出発点である(しかし、必ずしもそれは、後に述べる通り、この「弱さ」に自

ら奴隷になることではない)。この出発点こそが、『エミール』において、「弱者」が「助け」のメッセージを発し「他者」がそれに答えるコミュニケーションと不可分な言語記号論を巡る記述を必然化する真の根源なのである。本節では、まずは言語記号についての明示的な記述の多い第一篇から第三編までの議論から始め、この「生」という出発点の持つ言語記号論的観点がこの「他者」との関りを如何に導入するかの素描を試みたい。

『エミール』のまず提示する乳幼児を巡る言語記号論は、二つの論点を同時に押さえた上で理解する必要がある。一つは、無論、乳幼児による原初的な言語記号の発信様態であるが、もう一つはかかる言語記号に対する大人達の繊細で柔軟な反応もしくは読解の必要性である。事実、この二重の論点を踏まえねば「自然で全ての人に共通な言語 (une langue naturelle et commune à tous les hommes)」(IV, 285)とルソーの言う既に挙げたあの乳幼児の発するものどもは単なる身体動作から生まれる音声現象に過ぎない。「生まれるとき、子供は叫び声をあげる。子供の最初の時期は泣いて過ぐされる (En naissant un enfant crie; sa première enfance se passe à pleurer)」(IV, 261)。つまり、かかる現象を何かの「しるし」として受け取る他者(この場合では彼らの世話をする親や周囲の大人達)を欠けば、それは快苦の表情や叫びという孤独な身体反応のまま沈黙の闇に沈むだろう。むしろ、彼らの応答があつて初めて乳幼児はこれらの身体反応を他者に向けることを意識化し、己の身体とその「行動」を言語記号という「行為」とすることができる。「子供は欲求を感じてもそれを満たすことができず、叫びによって他人の助けを求める。『中略』彼の思い通りにならない状態にあればあるほど、それを変えるように頻繁に要求するのだ」(IV, 486)。更には、大人は乳幼児と子供の言語に注意を向けることで、むしろ自分達の言語習慣の特異な姿に(ルソーの場合はしばしば批判的な形であるが)気が付くことになる。むしろ子供の方のより「自然な語法」に根ざした語りをむしろ自分達が抑圧してきたことを

知る。例えば、ルソーは、ある程度大人の言語になれた子供が「l'air-je-t-va」と話し不当にも父親から叱られた例を挙げる(IV, 293-294)。この子供は、大人達による「v」の省略というかなり無理のある慣用的用法を採用せず、更にはそこで「je」と「v」の母音衝突を避けるために「i」を周到に挿入したのである。ここで興味深いのは、理性的であり「教える者」である筈の大人達が、彼ら子供からむしろ「教えられる」、或は「言語の用法」によって無意識に修得したものを「批判的に反省させられる」ことである。それはまた、言葉の抑揚や視覚的な身振りや表情そして「しるし」などの重要性を再認識させられることでもある。乳幼児の抑揚ある叫びについて「子供を研究しよう」とルソーが言うのはそのためである。「この言語は音節によってあらわされないが、抑揚があり音色があつて、聞き分けられる。私達の言語を用いることによって、私達はそれを捨て、やがて完全に忘れてしまったのだ。子供を研究しよう。そうすれば私達は子供から再びその言語を学ぶことになる」(IV, 285)。

さて、子供はいつまでも己の「弱さ」に頼ることはできないという不可避的な状況が特に第二篇以後大きく浮上する。もはや弱さへ救いを求めて幼児が無闇に叫びを発すること自体を教師や大人は警戒すべきとさえ『エミール』の著者は言う。「子供が弱くて感じやすく、生まれてつき何でもないことにもすぐ泣くようだったとしても、その泣声は何の役にも立たず、何の得にもならない様にすることによって私はやがてその涙のものを止めてしまふ」(IV, 299)。ここから、乳幼児期を脱した後の、大人のものにより近い言語(それもフランス語が中心となる)を子供達が修得する過程とその様々な問題点を巡る『エミール』の記述が始まる。「ものを言い始めると子供は泣くことが少なくなる。これは自然の進歩だ。一つの言語が他の言語に取って代わった訳だ」(IV, 299)。しかし、「弱さ」を乗り越えることは実は自然の進歩であるだけでなく、むしろルソーの教育論自体が要請することでもある。後に触れる様に、この「弱さ」を常に意識すること自体は決して忘却

されるべきではないとルソーは考える。しかし、『エミール』の記述が示す様に、子供は「弱さ」によって今度は大人達を支配することを学んでしまふ。「子供の最初の泣声は願ひである。気をつけていないと、それはやがて命令になる。初めは助けてもらっているが、しまいには自分に仕えさせることになる。こうして彼ら自身の弱さから、初めは自分が他の者に依存している感情が生まれるのだが、続いて権力と支配の観念が生まれてくる」(IV, 287)。それは更に彼の心に「利己愛」(この概念は次回になる後半部の論考で「自己愛」との錯綜した関係とともに重要となる)をも植え付けることになる。逆に、乳幼児の段階を脱した後のエミールの学ぶべき「言語行為」は、他者達の過剰な解説の意志が無ければ聞き取れぬ言語しか発せぬ、「弱さ」に溺れる子供のそれではもはやありえない。

とすれば、幼児の段階を経た後、エミールの言語教育において最初に重要となるのは、「行為」としての言表の他者への着実な効果である。まず、エミールは、相手に明確に聞き取れる発話を教わることになる。田舎の子供の大きく明瞭な発話が『エミール』の著者によって既に第一篇の段階からあれほど迄に推奨されるのは、そのためである。「都会の子供と違って田舎の」子供は彼女「農民の母親」にわかつてもらう必要のあることを、はつきりと大きな声で言うことを学ばなければならぬ。野良に出れば、父親や母親からも、他の子供からも遠く離れて散らばった子供達は、自分の言うことが遠いところにいる人にも聞こえる様に、聞いてもらいたい人からどのくらい離れているかによって声の大きさを加減する様に、訓練されなければならない」(IV, 295)。とは言え、ここで特にルソーによって着目されるのが、通常は言語記号本体というよりそれに付随すると看做される「抑揚」であるのに留意しよう。「話すことの第一の法則は自分の言うことを解らせることにあるのであつて、人々が冒す最も大きな過ちは話していることが解らないということだからだ。話に抑揚のないのを自慢するのは、その美しさと力強さを欠くことを自慢することだ。抑揚は話の

魂である (l'accent est l'âme du discours) (IV, 296)。よく伝わる言語を語るとは、書物に記述されうる効率的な言語の用例を単に声だかに読み上げるのではない。他者を前にした上で彼らへの「効果」を確かめつつ、特に書物のうちに記述することが困難なこれら抑揚を身体的に真に記憶させるべきであろう(事実、抑揚を表記することつまり「書記」化することの困難と弊害をルソーは『言語起源論』で強く主張してゐた (V, 390-393))。

とすれば、「自然状態」の人間たちの言語とのみと連関するだけの様に見える「自然記号」や「行動言語」をもまた、かかる「行為」もしくはその「他者への効果」の観点から『エミール』の著者が捉えてもいたのは言う迄もないだろう。つまりこれら言語記号が重視されるのは、他者との相対的世界を欠く直接性に主に支配される個的で自足的な世界への埋没へと傾くからではない。或はまた、「代補」たる記号それ自体の存在を希薄化することが主に目指されるからではない。『エミール』第四篇で取り上げられる「しるし」が、古代弁論術の伝統を彷彿とさせるものであるのに留意しよう。古代人が雄弁によつて成し遂げたことは驚くばかりだ。けれどもその雄弁は、ただ、見事な言葉を巧く並べることにあつたのではないし、それは、弁論家が語ることが最も少なかったときに、必ず最も大きな効果を収めていたのだ。もつとも彼らが生き生きと語つたものは、言葉ではなくしるしによつて表現されたのである (IV, 647)。この議論は、『言語起源論』第一部で再び取り上げられた (V, 376-378) のち、『ポランド統治試論』での政治上の「しるし」の活用 (III, 1007; 1020) へと発展することにもなる。成る程、先節で述べた様に、これらの言語記号が伝達すべき意味を瞬時に言わば「透明」に伝達すべき視覚的な自然記号であるのは確かである。しかし、まずルソーは、これらの「しるし」が他者を説得し感動させ更なる「行動・行為」へと駆り立てる驚嘆すべき弁論術的な「他者への効果」をむしろ強調する。更に言えば、実はこれらの「しるし」は、受信者に即座の解説を可能とする能力を要求するとは

いへ単なる「透明な」記号ではない。むしろそれらの殆どがある種の「象徴」であり、本節のすぐ後で詳しく触れる様に、強烈な視覚イメージの形で相手に働きかけることで受信者の「想像力」を生き生きと活性化させることを見逃すべきではない。「しるし」として視覚的に「眼前に提示される事物は想像力を揺り動かす」 (IV, 647) と明示されるのである。何よりもかかる想像力をかき立てる言語記号が前提とするのは、すぐに確認して行く様に、発信者たる子供そして青年の「生」の「感性的なるもの」に根ざした精神性、『エミール』第二篇で言われる「感性的知性」でなければならぬ。つまり、行動言語たるこれら「しるし」の驚くべき「効果」を支えるのは、正に子供時代に与えられる「生」と密接な「感性的なるもの」なのである。

四、想像力の言語記号 (「しるし」と

「感性的なるもの」としての「生」

さて、『エミール』において言語記号の問題圏が特にその最初の三篇で大きく脚光を浴びていることの含意を改めて考え直してみよう。それは何よりも、既に述べた様に、子供の「生」がむしろ言語記号によつて特に想定される他者との繋がりを必然化するという最も基本的な論点が前提とされるからである。そしてここで着目したいのは、他者を斯様に必然的に子供の「生」の内に介在させざる得ないということから不可避的に派生する問題圏である。この問題圏には二つの方向がある。一つは、利己愛の方向であり、これもまた既に第一篇及び特に「自己」が確立し始める第二篇から既に浮上するものである。とは言え、この方向が特に問題とされるのは、やはり異性関係への身体的素地が本格化すると同時に社交性それ自体が強力に青年エミールの内面を覆い尽くす第四篇以後に特に重要となる。しかし、この利己愛の方向性はこれと不可分な「自己愛」概念との関連でかなり詳しく論じる必要があるために、次の後半部の論考で別個に論じたい。むしろ本節で

最後に論じておきたいのはもう一つの方向性、つまり「想像力」と言語記号との関りが子供の「生」の次元により不可避に組み込まれることである。何故なら、「利己愛」以上に「想像力」がより子供の「生」と彼らの親しむ言語記号の「感性的なるもの」に深く関わる特権的な立場を持つからである。そしてこの問題圏は、特に第四篇の「しるし」を巡る記述で大きく浮上してくる。

さてルソーの同時代者ヴォルテールは、二つの想像力を区別した。一つは記憶の様に過去の印象の再生機能に傾く「受動的想像力」であり、もう一つは「反省(reflexion)」と結び付き過去の印象やイマージュを新たに様々に組み合わせる「能動的想像力」である⁽¹⁹⁾。しかし、ルソーにとって想像力の機能は二つの点からヴォルテールの二分法に収まりきれない独自のところがある。一つは、ルソーが想像力の中の「イマージュ」がもつ感性的な力を重視するからである。もう一つは彼の非現前性への観点が想像力の位置付けに複雑に反映されるためであり、ここではこれら二つの論点から「想像力」の言語記号論的問題圏の「エミール」における重要な含意に焦点を当てたい。

そもそも、今まで見てきた様に、エミールの修得すべき言語記号は、正に彼の身体性もしくは「感覚的知性」に適合するものであった。つまり彼のその独特な知性は観念ではなく、より感覚的な「イマージュ」に支配される。そして、想像力もまた、その用語自体が示す様に、空疎な言葉や思惟にまさに「体」つまり感性的「イマージュ」を与える点で、「感性的なるもの」としての「生」と深く関わる。「しるし」を巡る記述を正に導入する場面で『エミール』の著者が以下の様に言うのはそのためである。「我らの時代の過ちの一つは、あたかも人間たちが精神だけでしかないかの様に、知性を余りにそのまま用いることである。想像力に語りかけるしるしの言語を軽んじること、我々は言語の中で最も活力に満ちた言語を失ったのだ」(IV, 645)。無論、それはこの「想像力」の芽生えを理想的に導かれた第四篇の青年エミールにおいて初めて十全に機能する。既に、この青年は、先行する三篇に

において常に自らの獲得した経験を周囲の具体的事物という世界の世界の中に感性的に記憶させつつ「生」を送る様に周到に訓練されている。エミールは、「生」の具体性という出発点をもつことで、それに更なる感性的輝きを与える「想像力」を常に統御するのを可能にする。そんな彼の前に差し出される行動言語たる「しるし」はまさしく想像力に訴えかけ、感性的な魅力で訴える象徴であろう。だからこそ「しるし」とは、「想像力を揺り動かす」「事物」を眼前に提示することで受信者の心を発信者の言わんとすることへの期待に釘付けにさせる。「眼前に提示される事物は想像力を揺り動かすので、好奇心をかき立て、相手が何を言わんとするかと期待の中に精神はとりこにされる」(IV, 647)。

とは言え、上記の文面にはそれ以上のこと実は語られている。つまり、受信者は「想像力」を揺さぶられることで、その事物を超えた何かを予見する期待のうちに置かれる(この場合提示される事物はそれ自体以外を示唆する力を持つ特殊な感性的事物であろう)。例えば、アントニウスは、暗殺されたカエサル「死体」(これは『言語起源論』でのエフライムのレビの妻の寸断された「死体」の別ヴァージョンでもある)を「しるし」としてローマの民に無言のまま示す(IV, 647-648)。単に残酷な殺害の描写ではない。暗殺者達の行為への非難が(更にはおそらく彼らへの復讐という行為へと「行動する」ことが)更なる暗示的意味としてローマの民達の「生」に感性的に刻み込むことが目指される。この意味で、「しるし」を巡る記述に想像力が関わるもう一つの論点が暗黙に想定されることとなる。それは、つまり非現前性の機能である。確かに、この機能はここで最初の論点として述べた「感性的イマージュ」としての機能と互いに補いつつ(実際、「しるし」はすべてまずは特異な「イマージュ」としての感性的な魅力をもつ)「しるし」による言語記号教育を必然化する。事実、第二篇のエミールにとって周囲の具体的世界は彼の記憶の場たる書物へと変貌させられるが(彼を取り巻く全てのものは書物と成り、その書物の中で彼は

意識せずに絶えず記憶を豊かにするである。」(IV, 351)、同様に第四篇の「しるし」の記述にそれに相応するものがある。ルソーによれば、エミールにとってもこれらの「しるし」は古代では大地に感性的なイメージとして刻まれるべきものとされ、古代人達は「しるし」のこれらの記念碑で刻まれた書物としての世界を生きていた。「大地の表面はそこに古い記録(archives)が保存される書物だった。そういう記録集(actes)によって真正なものとされ、野蛮な人間の目に尊敬すべきものと見えた岩石、樹木、石塚は、あらゆる人の前にいつも開かれてあるその書物の頁だった」(IV, 646)。しかし、第四篇以前とは文脈上やはり決定的に異なる点があるのにも留意したい。そもそも第四篇の「しるし」を巡る記述は、『サヴォアの助任司祭の信仰告白』の後に位置する。神つまり不可視の存在であり世界の根拠たるものを巡る極めて思弁的な議論の後に登場するのである。換言すれば、これらの「しるし」は宗教・道徳・形而上学的な概念という一見すると不可視で抽象的な概念群を、青年エミールにイメージとして感性的化せしめ刻み込むためのものである。だからこそ、これらの「しるし」は、感性的な「生」との繋がりと非現前の機能を同時に持つ想像力と不可分なのである。

言語記号論から浮かび上がる想像力のこの二重の機能の重要性は、エミールの「生」の「感性的なるもの」にとって極めて厄介な問題圏を齎す。いや、ルソー自身がそのことに自覚的であるが故に一層それは興味深い問題圏を構成する。そもそも想像力の問題は、既に『エミール』第二篇で暗黙の形で、つまり大人が子供の教育をだめにしてしまふ彼らの「先見の明」の弊害の形で導入される。「先見の明。絶えず私達を私達の外に引っ張り出して、しばしば、我々が到達できないところにおく先見の明、これが我々のあらゆる不幸の本当の源だ」(IV, 307)。想像力は現前せぬ事象を呼び起こす力である限りで、単に過去を想起する能力ではなく、未来へと企投する能力でもあるからである。しかしまた、子供達自身も自ら想像力の危険に晒される存在であり、

ルソーは子供達自身における想像力の早熟な展開への警戒を怠らない。例えば、第二篇の後半部の重要な議論をなす五官の訓練の中での、「暗闇」と「夜の遊び」を巡る記述がそれである(IV, 382-388)。見えぬ「暗闇」の中で敵を捏造し恐れを増幅する想像力(「そこで想像力を働かせることを余儀なくされ、やがてこの想像力を抑えきれなくなつて、自分を安心させようとする」と、一層私は不安になるだけである。物音を聞けば泥棒かと思う。何も聞こえなければ泥棒かと思う。」(IV, 384)を、自らの五官の鍛錬によって排除することがこの時点から密かに目指されるのだ。確かにここでは、今ここにある「現前」を少しでも損なう或は失墜させるものを忌避するのが執拗に目指される。

しかしながら、想像力の発生と展開が、他者との交流を必然化する言語記号の能力の進展と同様に、エミールそして子供一般にとって不可避な事態であるのをルソーは否定しない。別の言い方をすれば、想像力は言語記号の能力と不可分であり、言語記号と同じく人間にとって必要不可欠であるのが意識されるということである。そもそも『エミール』は、「想像力」を「自己の外に自己を移す」ことで自己の内非自己として本来現前せぬ他者に感受することを可能にする能力としていた。「だから想像力が働かねば、つまり自分の外へ自分を移すことができなければ、誰も感じ易い者にはならない」(IV, 506)。この著作とはほぼ同時期に執筆された『言語起源論』は、人間の理想言語たる南方言語の成立を語るその第九章でその言語の発生と不可分な状況として、「憐れみ」や「反省」等の能力と並んで「自己の外に自己を移す」「想像力」の発生を語る(V, 396)。つまり、想像力は、言語一般の二つの主要な方向(無論、言語記号一般のこれら以外の方向(例えばルソーも良く了解していた、知性と言語の相互補完関係など)を指摘するのは可能であろうが)、「非現前せぬものを現前させる」機能と、そして他者世界との連携つまり社会的繋がりの機能とを同時に持つものだからである。ここで再び「想像力」が、「言語記号の感性的なるも

の」がもつと同様な可能性をもつことにルソーがやはり着目するのを見逃すべきではない。例えば、先程の「暗闇」での「想像力」の過剰を巡る第二篇の文面のすぐ後で、「夜の遊び」がエミールに齎す効果をルソーは以下の様に言う。「子供のころの夜の遊びの思い出に満たされている想像力は、容易なことでは人を怯えさせる対象に向けられることは無いだろう」(IV, 386)。「想像力」を、「暗闇」の恐怖を増長する能力としてではなく、現実の「生」の確かさに裏打ちされた他者との遊びの陽気さの「思い出」の感性的魅力によって「暗闇」を支配させる手段と出来る。言わば、エミールの「生」の着実な歩みを冷静に進める手段として「想像力」が彼の「感性」の内で働くのである。しかしやはり重要なのは、今しがた挙げた『エミール』そして『言語起源論』第九章での「想像力」を巡る記述である。いずれも極めて似た文面を掲げるだけでなく、実は、他者と自己の「生」を感性的に繋ぐ「憐れみ」という感情の発生との連続性が指摘されていたのである。

「事実、我々を我々の外へ移して、苦しむ生き物に同化させることが無ければ、言わば、我々の存在を捨ててその者の存在に成るといふことが無ければ、どうして我々は憐れみに心を動かされよう。〔中略〕だから想像力が働かねば、自分の外へ自分を移すことができなければ、誰も感じやすくはなれない。」(IV, 505-506)。「憐れみは、人間の心に自然であるにせよ、それを働かせる想像力が無ければ永遠に活動しないままであろう。我々はどうして憐れみに心を動かされるのか。我々を我々自身の外に移し、我々を苦しむ存在に同化させることによってである」(IV, 386)。つまり、「言語記号」と同様にこれと不可分な「想像力」に十全に対峙し、それを自らの「感性的なるもの」のうちに刻み込み修得することが、ルソーの倫理論の一つの根源的な基礎たる「憐れみ」への確かな通路を確保することなのである。

しかし、それはまた「行動する彫像」であるエミールの「自然の歩み」つまり「生」が要請する必然でもあることを忘れるべきではない。思春期に入るエミールの身体そのものが、異性を対象としつつ今迄以

上に他者との関係をそれも他者との合一的關係を劇的なまでに要請し始めるからである。それは第三篇迄の思春期以前にあるエミールの「自然の歩み」とは異なる次元の「生」である。とは言え、おそらくはこの「生」の暗黙の「叫び」は、乳幼児が他者へ発する「叫び」から、思春期のエミールがやがて周囲の他者そしてソフィへと差し向ける眼差しや言葉そして行為へと至る生成変化の中で、一つの連続性に貫かれつつ変化し展開する持続でもあろう。このことを我々は今回の論考において確認することとなる。

結びにかえて

我々はかくして、次の後半部の論考の最初の地点にようやく到達したことになる。そもそも言語記号を巡る記述が『エミール』の各篇に散見されること自体、「エミール」という「行動する彫像」が他者・主に社会人たる親や大人達」とのコミュニケーション無しに成長し得ぬことの証であったと言える。この観点故にこそ、我々はこの著作の教育論が、コンディヤック的な彫像の感覚教育とは異なるピュグマリオン主義の観点から捉えられることに着目しておきたい。つまり、ピュグマリオン主義では「彫像」にその作者であり彼女の最初の発話の宛先たる「ピュグマリオン」という他者の存在が常に必然化される。この意味で、『エミール』の「行動する彫像」たるエミールもまた、コンディヤックのあの孤独な彫像とは異なり、他者からのまなざしと配慮そして他者との言語行為の中で成長して行く。しかし、またこの行動する彫像は、彼のピュグマリオンたる教師そして『エミール』の著者を含めた大人達に、単に受動的に教育される存在には終わらない。我々大人が忘却しがちな事実、つまりこの「行動する彫像」を含めた我々の「生」の「感性的なるもの」に言語記号そして他者とのコミュニケーションが根ざしていることを示唆してくれる存在でもあった。「行動する彫像」エミールを観察する言わばピュグマリオンたる大人である

我々『エミール』の読者達もまた、そこに自らの感性的な起源を再び見出すことになるのである。

とは言え、誕生から幼年期を経て青年期のエミールの言語は、「感性的なるもの」たる自らの「生」に促され他者と言語記号を介して関係する中で、ある種の困難と対峙せねばならない。それが特に第四篇の「しるし」の記述で前景化した問題圏である。それはまた、感性的な言語記号たる「しるし」を介して、「想像力」の感性的力と非現前性の二つの方向を、特に後者の方向の危険を意識しつつ、エミールが積極的に受け入れることを最終的に認めることである。

さて、この非現前性の方向は、異性への性的感情の芽生えそしてこれと不可分なより強力な社会関係がエミールの心を席卷する第四篇以後に大きく浮上する。しかし、それでも本論が示し続けた、「生」の「感性的なるもの」は忘却されない。それどころか一層不可欠な教育論上の源泉となっていく。次回の論考はまさにこの非現前性の方向の倫理・社会的位相、つまり「自己の外に自己を移す」ことを構造的に抱え込むことで、『エミール』の「行動する彫像」が直面する「利己愛」の問題圏を検証することから始めたい。そしてそこにおいても再び「生」の「自然の歩み」への回帰が、「利己愛」に対抗しうる「自己愛」の「精神的なるもの」に結実すること、更にはソフィーというもう一人の「行動する彫像」との出会いによる新たなピュグマリオンズムへと導くことを明らかにしていきたい。

註

- (1) ルソーの原典は以下のブレイアド版全集を用い、参照ではローマ数字で巻数をアラビア数字で頁数を示す(訳は主に白水社『ルソー全集』に依る)。Jean-Jacques ROUSSEAU, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 1959-1995, 5vol.
- (2) Ernst CASSIRER, «Das Problem Jean Jacques Rousseau», *Archiv für Geschichte der Philosophie*, XLI, 1932, p.509.

- (3) Peter JIMACK, «Les influences de Condillac, Buffon et Helvétius dans l'Émile», *Annales J.-J. Rousseau*, 1956-1958, t. XXXIV.

- (4) Georges-Louis de BUFFON, *Histoire naturelle générale et particulière*, 5e éd., Paris, 1752-1768, t.VI, p.88 (remarque citée par P. Burgelin de l'édition de Pleiade, IV, 1324.)

- (5) Etienne Bonnot de CONDILLAC, *Traité des sensations*, in *Œuvres complètes philosophiques*, éd. par Georges Le Roy, P.U.F., Paris, 1947-1951, t.I, p. 更び コンディヤックの彫像についてのジョッフォンも含めた先行者達との関係およびジョン・クザンらを含めた後世からの評価については、以下の研究に割と詳しい指摘がある。Christine QUARFOOD, *Condillac, la statue et l'enfant*, tr. fr., Paris, 2002, pp.118-127.

- (6) これら継起性と全体同時性の連続性もしくは統合という論点は、『人間認識起源論』から始まり『感覚論』と『論理学』を経て晩年の『計算の言語』にまで至る、コンディヤック哲学の一貫した主張の一つと言える。この点については既に発表した以下の拙論で検証した。Akira BABA, *L'Essai sur l'origine des langues et la formation de l'esthétique de «la voix intérieure»*, thèse de doctorat à l'univ. de Caen, 1998, part. I, ch. 3, pp.152-158 et 178-189.

- (7) コンディヤックにとって、言語記号そして心的能力を含めた「感性的なるもの」の価値は、後の理知的で効率的な自然な認識の雛形として評価されるが、特にここで彼がその雛形を視覚の比喩でしばしば語られる「全体同時性」のもとで専ら把握していたのはむしろ彼の立場の限界を示すものでもある。前記の中の拙論で述べた様に、ルソーの言語論はまさにその限界を突くものでもあった。BABA, *op.cit.*, part.I; 馬場朗「美的言語における「感性的なるもの」と「知性的なるもの」——ルソーによる視覚クラヴサン批判の含意するもの——」『日本18世紀学会年報』二〇〇号・二〇〇五年。

- (8) 既に「空間認識(特に遠近法的な知覚)を、マルブランシュは「本性的判断(le jugement naturel)」の理論を介して、たとえ神の力の介入による無意識的な計算と言う形ではあるにせよ、人間の生存レベ

ルから説明せんとした。無論、ルソーにとって、ある意味でかかるアフォードメンス的とも言える知覚は、経験的に獲得することで身体の内にも本能化するものであろう。しかし、「生」自体を数学的知へと発展しようとする知覚の進展に置く限りで、彼はマルブランシユと同じく極めて「現実主義者」なのである。

- (9) Yves Vargas, *Introduction à l'Émile de Rousseau*, Paris, P.U.F., 1995, pp.59-60.

- (10) 部分的に『エミール』の言語記号論に触れる研究は割とあるものの、この著作の言語記号論のみを集中的に扱った研究は少ない。ここでは、既に挙げたヴァルガスを加えた以下のものを主に参照した。Daniel DROIXHE, «Rousseau et l'enfance de la parole», *De l'origine du langage aux langues du monde*, Tübingen, 1987; VARGAS, *op.cit.*, «Le langage, du babil à la philosophie», pp. 291-301.

- (11) この点については、既に拙論で検討した。馬場朗、「言語と精神の二重の生成における『感性的なるもの』：ルソー『人間不平等起源論』における言語論」、『紀要』群馬県立女子大学、二二号、二〇〇〇年。
- (12) Jean-Baptiste DUBOS, *Les réflexions critiques sur la poésie et la peinture*, Paris, 1770 (1ère éd., 1719), t.I, p.414 et suiv (part. I, sec. XI).

- (13) 原語は、第四篇に出てくる古代の「しるし」と同じ「signe」だが、評価が全く違う上に、第四篇のほうは「身振り」(例えば、「芥子の頭を切る」を含めたある種の「象徴」の様なものであるのに対し、こちらは斯様な特殊な感性的な力とは無縁な明らかに単なる「何かの代わりになるもの」であり本やら文字やら数字の様なものを含めた「記号」である。

- (14) この点に付いて最初に注意を促したのは、ブレイアド版全集第五巻刊行以前の『言語起源論』の最初の批評校訂版を作ったポルセである。それまで余りに『不平等論』との関係のみで捉えられていた『言語起源論』が、むしろ『エミール』などより近い立場に立っていることを彼は示した。また、彼の友人のデリダも同じくこの点を指摘する。Charles PORSET, *ses Remarques ajoutées à son*

édition de l'Essai sur l'origine des langues de ROUSSEAU, Bordeaux, 1968, pp.21-24; Jacques DERRIDA, *De la grammatologie*, Paris, 1967, pp.269-270.

- (15) これは既に挙げたポルセやデリダの立場にも当てはまることであらう。

- (16) このいわば極めて反ニーチェ的な観点をルソー解釈で強調するのはエドモン・ティツェタン TODOROV, *Frele bonheur : essai sur Rousseau*, Paris, 1985. 更には、フアンリ哲学の影響化にあるオディのルソー解釈もまた「生」の受動性のルソーの「自己愛」という基本概念における積極的役割に着目する限りで、この観点に連なることとなる。Paul AUDI, *Rousseau, éthique et passion*, Paris, P.U.F., 1997, pp.91-95.

- (17) この点については、ルソーの批判的立場それ自体を相対化し批判する視点として以下のものも参照のこと。DERRIDA, *op.cit.*, pp. 321-326.

- (18) この「しるし」にまつわる政治論的射程については、バチュコの研究がある。Bronislaw BACZKO, «La cité et ses langages», in *Rousseau and the eighteenth century*, éd. par M.Hobson, et R. Wokler, Oxford Univ. Pr., 1992.

- (19) VOLTAIRE, art. «Imagination», *Encyclopédie*, éd. par Diderot etc., t.VIII (1767), pp.560-563.

付記：本稿は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)）の成果の一環をなす。